pon kanpi-sos

ポン カンピソシ

北海道

6

◆アイヌ文化紹介小冊子 ウエネウサラ 口頭文芸

本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年１冊ずつ刊行しています。

これまでに、第１冊目「イタク 話す」で言葉を、第２冊目「イミ 着る」、第３冊目「イペ 食べる」、第４冊目「チセ 住まい」で衣・食・住を、第５冊目「イノミ 祈る」では信仰について紹介してきました。

この第６冊目では「ウエネウサㇲ」と題して、口頭文芸についてとりあげました。アイヌの口頭文芸のあらましについて、物語の例などを挙げながら紹介しています。またアイヌの口頭文芸について学ぶための文献や、実際の語りの様子などを聞いたり見たりできる資料や施設などについて紹介しています。

ポン　カンピ　ソシ
pon　kanpi－sos → 小冊子
小さい　紙　束

ウエネウサㇲ → (物語、よもやま話などを) 語り合う／語り合い楽しむ
uenewsar　よもやま話、世間話

目次

［1］ アイヌの口頭文芸のあらまし―― 2
口頭文芸とは―― 2
歴史と現状―― 4

［2］ さまざまな口頭文芸―― 8
英雄叙事詩―― 10
神謡―― 16
散文説話―― 20

［3］ 口頭文芸について学ぶために―― 24
文献など―― 24
視聴覚資料―― 28
博物館など―― 31

［1］アイヌ口頭文芸のあらまし

口頭文芸とは

アイヌ民族が育んできた文化の一つに、様々な口頭文芸(こうとうぶんげい)があります。

口頭文芸とは、文字で書かれたものを読むのではなく、語り手の話を聞いて楽しみ味わうことで伝えられてきたものです。口承(こうしょう)文芸、口承文学などとも呼ばれます。文字で書かれた文芸と違って、同じ話でも語り手によって、また同じ語り手でもその場やその時によって、語り方や表現などにその人その時ならではの味わいが含まれるのも特徴です。

Oral Literature

Among the cultural assets the Ainu people have created and passed on is the tradition of oral literature which was developed in various forms and styles. As opposed to the reading of written texts of literature, such oral literature produces a richness in artistry and entertainment for the audience who then transmit such traditions to the following generations. In contrast to written literature, even performances of the same tales characteristically vary greatly depending upon the reciters, occasions, the timing of performances, the aesthetics of the recitation technique as well as on expressions generated ad lib during the recitation and performance.

Introduction to Ainu Oral Literature

アイヌの文芸の中で口頭で演じられるものには、広く見ると、昔話や神話、伝説などの物語のほか、歌謡、なぞなぞ、あらたまった場での挨拶(あいさつ)の言葉、祈りの言葉など様々なものがあります。

この小冊子では、これらの中から、物語を中心に紹介します。

Within the wider spectrum of orally performed Ainu literature, in addition to such tales as are found in folklore, mythology and legend, there appear genres and styles of various sorts including songs, riddles, words exchanged in the formal course of salutations and greetings and prayers. This handbook sheds lights on Ainu oral literature focusing on that literature which is representative of stories.

歴史と現状

明治時代以降、日本語による教育をはじめとする同化政策のもとで、アイヌ語は日常生活では次第に使われなくなり、アイヌ語の口頭文芸が語られる機会や、語ることのできる人、聞いてわかる人も少なくなっていきました。

儀式のときや大人たちの集まりの場などでは、集まった人々がごく自然に様々な口頭文芸を語りあい楽しんでいましたが、子どもたちには敢(あ)えてアイヌ語を教えようとしない人が多かったといいます。また、これはアイヌに限ったことではありませんが、ラジオ、テレビなどの娯楽が登場することで、親や年寄りから物語を聞く機会が減っていったとも言われています。

このような時代の中でも、自分の知っている物語を自ら記録したり、周囲のお年寄りたちから物語を聞いて書きとめた人たちがいました。こうした採録に協力を惜しまなかったお年寄りもいましたし、ふだんの暮らしの中で様々な物語を語りあうことが途絶えたわけでもありませんでした。

写真1　知里幸恵(ちりゆきえ)遺稿ノート
1909（明治42）年から1922（大正11）年まで旭川に住んでいた知里幸恵さんが自分の知っている口頭文芸などを書きとめたノートです。

Under the assimilation policies, including education in Japanese, which were enforced from the Meiji era onward, the Ainu language has gradually disappeared from daily use. This disappearance has resulted in much less opportunity for the performance of the Ainu literary tradition and in the almost entire loss of the ability to perform or to appreciate the literature on the part of the Ainu people.
People had spontaneously and naturally recited various sorts of oral literature during ritual occasions and among gatherings of adults, but we may suppose many of those adults dared not to teach the Ainu language to the children. As has been the case with other ethnic groups, the advent of alternative forms of entertainment, most notably radio and television, reduced the opportunities for children to hear the tales recited by their parents or grandparents. Despite the cultural changes of the times, some people made written records of tales they have memorized and the tales they had heard from the elderly people living in the communities. Elderly people responded collaboratively to such initiatives as these, and therefore the tradition of reciting various stories did not entirely cease in their daily lives.

近年、アイヌ語の復興や継承が唱えられるようになり、口頭文芸をめぐる環境も大きく変わりました。各地でアイヌ語やアイヌ文化を学ぶ教室などが開催されるようになり、それらの場で教材や学習の手引きとして物語が用いられています。口頭文芸の公演なども行なわれるようになりました。アイヌ語の辞書や入門書なども刊行されるようになり、物語を録音した学習用の教材や、長年にわたって採録した物語をまとめたシリーズなども刊行されています。

写真２　アイヌ民族博物館主催の「アイヌ文化教室」で
物語を語る上田トシさん

In recent years, the climate surrounding oral literature has changed as seen in the increasingly renewed need to revive the Ainu language. Educational programs for studying Ainu language and culture provide venues where the tales are used as textbooks and guidebooks for learning. Furthermore, the Ainu oral literature has come to be performed for the public. Ainu language dictionaries and handbooks for introductory language courses have been published and tapes of tales are used for learning. In addition, tapes of stories which have been collected over a period of many years have been released in serial form.

アイヌ口頭文芸の調査・研究の歴史

アイヌの口頭文芸を記録したり調べたりすることはいつごろから行なわれてきたのでしょうか。

早い例では、18世紀頃の日本の江戸時代の文献に少しずつですが記述が見られます。その後では、例えば1792年に書かれたとされる上原熊次郎（うえはらくまじろう）の『もしほ草』には、物語のアイヌ語原文と、その一部を日本語に訳したものなどが記されています。

明治以降になると、物語のアイヌ語そのものを筆録し訳を付け、さらに物語の様々な種類に注目してそれらの区分や特徴について研究することが行なわれるようになりました。イギリス人の宣教師ジョン・バチェラー（1854～1944）は、1880年頃から主に北海道の南西部を中心にアイヌ語やアイヌ文化を記録し、いくつかの物語を採録しています。

写真3　もしほ草（復刻版）

20世紀の初頭、ポーランド出身のブロニスワフ・ピウスツキ（1866〜1918）は、主にサハリン（樺太）でアイヌ語やアイヌの民俗についての調査を行ない、口頭文芸を記録しました。このとき現在のレコードにあたる蝋管を使って録音を行なっており、これが現在確認されるアイヌ語の音声記録としてはもっとも古いものとされています。

同じ頃から、金田一京助（1882〜1971）は、北海道各地やサハリンでアイヌ語の調査を行ない、多くの物語を採録してそれらの研究を進めました。その弟子の久保寺逸彦（1902〜1971）や知里真志保（1909〜1961）はさらに、様々な種類の物語を採録し、その整理・調査を行ないました。これらの成果は、現在までの研究に大きな影響を遺しています。

写真４
久保寺逸彦さんが1935（昭和10）年に録音したレコード（北海道立図書館所蔵）

［2］ さまざまな口頭文芸

アイヌの口頭文芸には、メロディーを伴(ともな)って謡(うた)うように語るものもあれば、それよりは比較的単調に、話し言葉のようにして語るなど、様々な語り方をするものがあります。また物語の内容にもいろいろな種類があります。これらの種類の区別のされ方は、おおまかには各地域で共通するところはあるものの、違っているところもあります。アイヌ語での呼び名も地域によって異なります。

現在のところ、アイヌの口頭文芸のうち物語については、一般には大きく３つに区分して説明され、それぞれ、「英雄叙事詩(えいゆうじょじし)」「神謡(しんよう)」「散文説話(さんぶんせつわ)」などの呼び方が用いられています。この小冊子でも、この区分に従って説明することにします。

Ainu oral literature is performed using different styles of recitation. Some tales are sung to melodies while others are recited in a relative monotone similar to ordinary speech, and the content of the folkloric tales varies greatly. The categories of oral literature are designated in almost the same manner in various regions. There are, however, different ways of categorizing material according to content and furthermore, varying Ainu words are used to designate and describe respective categories among different regions.
Ainu oral literature in which stories are related is broadly divided into three general categories, namely those of "heroic epics," "mythic epics" and "prose tales." This handbook describes each of the three categories in accordance with this classification by genre.

「ユーカラ」という言葉

アイヌの口頭文芸の呼び名として、「ユーカラ」という語が比較的よく知られているようです。

この「ユーカラ」という言葉は、英雄叙事詩を指す呼び名の一つである「ユカㇲ」から来ているものと思われます*。

この小冊子でも述べているように、アイヌの口頭文芸には様々な種類があり、それぞれにアイヌ語での呼び名も異なります。同じ英雄叙事詩でも、地域によってはサコロペ、ハウキなどと呼ばれるものがあります。

したがって、アイヌの口頭文芸全体をさして「ユカㇲ」と呼んだり、あるいはそれをアイヌの口頭文芸の代表的なものとして紹介したりするのは適切な表現とは言えません。

＊「ユカㇲ」を現在一般的に用いられているアイヌ語のローマ字表記法で書くと yukar となります。最後の r は、後ろに母音が付かない音です。現在のカタカナ表記では、このような場合、小文字で「ㇲ」と書いて ra「ラ」とは区別します。また、この言葉のアクセントは「ユ」のところにあるため、この音がやや長く「ユー」と聞こえることがあります。

"Yukara"

The term "yukara" may be relatively well known as a word referring to Ainu oral literature. The word "yukara" presumably derives from *"yukar,"* which is one of the terms referring to the heroic epics.

As discussed in this handbook, there are various categories in the oral literature of the Ainu people and the Ainu words used in referring to the respective categories are different. The heroic epics, for instance, are designated differently depending on region and they are called *"sakorbe"* in one region while termed *"hawki"* in another region.

Therefore, we can argue that the use of the word *"yukar"* when referring to Ainu oral literature as a whole, or presenting the term *"yukar"* as being representative of Ainu oral literature may not be entirely appropriate.

英雄叙事詩

短いメロディーを繰り返しながら物語の言葉をのせるようにして語られます。

語るときのメロディーは、語り手がそれぞれに独自のものを持っているとされており、他の人から聞いて覚えた物語でもその人が演じるときには自分のメロディーで語ると言われています。また、物語の途中で節回(ふしまわ)しが変えられる場合もあります。

語り手や聞き手は、木の棒などを持って、座っている近くを叩きながら拍子(ひょうし)をとります。聞き手や、ときには語り手自身も、物語の展開に応じて短い掛け声をかけたりします。

いっぱんに長大な物語が多く、語り終えるのに数十分から数時間あるいはそれ以上かかると言われています。

写真５
英雄叙事詩を語る八重九郎(やえくろう)さん

Heroic Epics

The main text is sung to a short repetitive melody and each reciter has his or her own melody. Even though the reciters have memorized the tale by listening to others, they may perform using their own personal melodies, and the melody could shift to another melody in the middle of the recitation. The reciter and the listeners tap out the time by beating blocks of hand-held wood while seated. The listeners, and occasionally the reciter as well, interject short, rhythmical exclamations at certain points of story development in the song.

The heroic epics are usually long, lasting a few hours or even longer, although some are as short as several minutes.

物語の内容は、空を飛んだり海にもぐったり、土の中を突き進んだりできるような、超人的な力を持つ主人公の少年が、自分の生い立ちや、冒険や恋愛や戦いなどの体験を自ら語る、といったものがこれまではよく知られています。

このような物語では、主人公たちの日常の暮らしぶりも描かれますが、例えば主人公の戦いの場面では手に汗を握るような激しい描写が繰り返されるなど、壮大で血湧(わ)き肉躍(おど)るようなストーリーのものが多いことも特徴とされています。

いっぽうで、若いときにはいさかいもしたけれど今は仲良く暮らすようになったという夫婦の物語など、必ずしも上に述べたような枠にはあてはまらない内容の物語もあります。

Among the well-known epics are the tales which deal with a young boy with the superhuman ability of flying in the sky, diving into the sea and cleaving his way under the earth. His life, adventures, courtships and battles are spoken using first person narration.
In such stories as these, vignettes of heroes' everyday lives are also presented. These include, for instance, a battle scene depicted over and over in fiery and passionate language which can cause the hands to sweat. The heroic epics are characterized by many spectacular, stirring and thrilling stories.
However, not all of these tales fall into the category of heroic stories from the viewpoint of content. Some are about a married couple who led a discontented life while young but who came to live together happily eventually.

物語紹介：「鹿の角のある衣を身につけた少年の物語」*

これは釧路地方の鶴居(つるい)村の八重九郎さんが語った英雄叙事詩の一つです。
物語のあらすじは次のようなものです。

私は小母(おば)に大事に育てられていました。私の家の家宝を置くところ、寝台の枕もとに、牡鹿が立っているのとそっくりな、鹿の角のある衣が置いてありました。毎日寝ないで番してくれていた小母が、あるとき眠くてたまらない様子でいるうちに眠ってしまったので、私はその衣の中に身を入れて、鹿の姿になって外へ出ました。そして、人は行ってはいけないという道を行って、神の遊び場に着きました。池に飛び込んで泳いだりしていたら、男たちが騒いでやってきます。中に大きな男が一人います。男たちは私を見つけて、「鹿だぞ、射止めろ」と矢を撃ってきます。私はそれを角でぽんぽんと受けて、一発も体にあたらせないで、角を振りまわして向かって行くと、男たちは逃げてしまいました。大きな男は向かってきたけど、角ですくって池の中に逆さまにして沈めてやりました。そして家に帰ってみたら、小母はまだ眠っていたので、静かに衣を脱いで、もとから寝ていたようにして寝ました。小母は目をさますと、またいろいろご馳走(ちそう)を作ってくれます。

そうしているうちに日がたって、私が池に沈めた大男を、悪い力を持った女が助けて自分の夫にして、みんなで私のことをやっつけてしまおうと相談していると小鳥たちが噂して教えてくれました。どうしたらいいかと思っていると、また小母は前のように眠ってしまったので、私は鹿の姿になって静かに外へ出て、その男と悪い女のいる国へ跳ねて行きました。そしたら大きな家があって、中でみんなが騒いでいます。その連中と戦争になって、戦っていると、雲に乗って雷のように音をたててやってきた者がいて、それは私を育ててくれていた小母でした。小母は、「あなたさま、私に黙って出かけるということがありますか。私が来たからには心配しないでください」と言って、相手をどんどん倒していきます。二人で戦って、連中をどんど

＊アイヌの口頭文芸には、もとから題名が決まっているわけではありません。たいていは、語り手の説明や物語の内容をもとにして題名を付けています。この小冊子でも、それぞれの物語について、出典の文献をもとに題名を付けました。

ん倒し、大男と悪い女が手に手をとって逃げるのを追いかけ、悪いやつばかりの国でも戦ってやっつけて、そしたらまた男と女は逃げるので……と、どんどん戦って追いかけて行くと、いよいよ、もうそれより行くところのない世界のはずれに来ました。そこで相手二人との戦いになって、激しい激しい戦いのすえ、私は大男を、小母は悪い女をたおしてしまいました。

　戦いも終った今となっては、安心して家に帰るのです。

（北海道教育委員会生涯学習部文化課編『アイヌ民俗文化財　口承文芸シリーズ　八重九郎の伝承（6）』北海道教育庁　1998年　所収。このページと18、22ページに掲載した物語のあらすじは、それぞれ出典の文献をもとに当センターで作成したものです。）

写真６
『アイヌ民俗文化財　口承文芸シリーズ
八重九郎の伝承（6）』

この物語の、主人公の戦いに小母が加勢にかけつけた場面を紹介します。左側がアイヌ語のカタカナ表記とローマ字表記、右側がその日本語訳です。*

アンコロ　an=kor	私の
イレス　i=resu	育ての
コンナラペ　konnarpe	小母さんが
「トカイペウタリ　"tokay pe utari	「こいつら
ウェン ペ ウタリ　wen pe utari	悪者どもを
テケ　アニ　teke ani	手づから
エチウタリ　eciutari	お前らを
エミンピ－　emimpi-	懲ら
－チャココ　-cakoko	しめて
エヌキ　ネ」クス　enuki ne" kusu	やるぞ。」と
ハウキ　カネ　hawki kane	言いながら
テレケ　シリ　terke siri	飛ぶようす、
オプ　アニ　ワ　op ani wa	槍を持って
トカイ　ペ　tokay pe	そいつら
ウタリ　utari	どもの
ポロ　シリケ　poro sirke	ほとんど
アイヌ　ウタリ　aynu utari	人間たちの
テッサマケ　tessamake	そばを
テレケ　terke	飛んで
シユプ　シリ　siyupu siri	走るようすに

＊物語のアイヌ語原文を書き表わすとき、英雄叙事詩のようにメロディーを伴うものは、たいていの文献では、語りの様子を伝えるために、そのメロディーの区切りに合わせて改行する表記が行なわれています。この小冊子でも、出典の文献の表記に従って掲載しました。

コヤイカタヌ　koyaykatanu	恐れ入って
エヌキ　enuki	おり
キ　コ　ki ko	ますと、
オプ　エトゥタ　op etok ta	槍の先で
コマム　パッケ　komam patke	枯れ葉の散るようになるのには
コヤイカタヌ　koyaykatanu	恐れ入り
エヌキ　enuki	まし
キナ　ki na	た。

口頭文芸によく見られる表現

例えばこのページに紹介した英雄叙事詩では、この後の場面で、戦いが長く続く様子を「二年がかり／三年がかりで／戦って……」と対句のような表現を使って語られています。19ページに紹介した神謡で、「着物の／（縫い目の）二つの間に／二つの光が／きらきらと光り／三つの光が／きらきらと光りました」とあるのは、縫い物が上手で縫い目がたいへん美しいことを述べるときによく見られる表現です。このような、ある様子を述べる際に似たような表現を用いることは、アイヌの口頭文芸の特徴の一つです。

また、「窓の縁の上」を言うのに「窓の縁／縁の上で」と繰り返しのような表現を使うことや、ものの呼び名などに日常の会話などで用いるものとは違った言葉を使う例もあり、後者は、特に英雄叙事詩に多く見られます。

こうした表現は、語るメロディーにのせやすい言葉になっていることも多く、それらをたくさん覚えて、場面に合わせて使いこなせるようになることで、物語をより巧みに語れるようになるのだとされています。

神謡

短いメロディーを繰り返しながら物語の言葉をのせるようにして語られます。

それぞれの物語ごとに、おおよそ決まったメロディーがあります。また、語るときには、決まった言葉が繰り返し挿入（そうにゅう）されることが特徴です。その言葉はそれぞれの物語によってだいたい決まっています。19ページの例では、「アテヤテヤテンナ　テンナ」という言葉がそれにあたります。このほか、アオバトのカムイ* の物語で「ワオリ」、シマフクロウのカムイの物語で「フム　フム　カト」などの例が見られます。ただし、伝えられてきた地域や語る人が違えば、内容が同じような物語でも挿入される言葉が同じとは限りません。また、これらの言葉は神謡の主人公であるカムイの鳴き声などからきているものが多いという説もありますが、言葉の意味がよくわからない場合もあります。

一つの物語は数分で終わるものもあれば、一時間以上かかる長いものもあります。

Mythic Epics

The main text is sung to a short, roughly defined, repetitive melody for each story. The mythic epics are characterized by persistently repeated refrains which are uttered between the lines. Choruses are specifically connected with each tale, as shown in the example on page 19 in which *"ateyateyatenna tenna"* appears as a refrain.

The refrains to be inserted may differ even in tales with more or less the same content if they are narrated by different reciters who live in different regions. One may speculate that these refrains, in many cases, are onomatopoeic, featuring the sound of the cry of the *"kamuy"*, a leading character of some stories, and the meanings of these refrains are often not understood. The recitation of the tales takes from a few minutes to more than one hour depending upon the individual tales.

In view of content, the mythic epics deal mostly with *"kamuy"* of all sorts including *"kamuy"* of fauna and flora, and thunder or illness. They appear as speakers using first person narration, introducing vignettes of their experiences in the world of *"kamuy"* as well as in the world of human beings.

These tales teach people the proper mindset and attitude with which they should be prepared for dealing with animals, plants and natural phenomena, and present the wisdom they should learn to acquire. In addition to these tales which have an educational purpose, some stories describe the deeds and emotions of *"kamuy"*.

物語の内容は、動物や植物のカムイ、雷やあるいは病気のカムイなどさまざまなカムイが、カムイの世界や人間の世界で体験した身の上を語るものが多く見られます。また、このような物語を通じて、動植物や自然界の出来事などに対する人間の心構えなどが語られるものもあります。

写真７

知里幸恵『アイヌ神謡集』
神謡13編のローマ字表記のアイヌ語
原文と日本語訳を載せた文庫本です。

＊カムイ

アイヌの信仰では、あらゆるものに〝魂〟が宿っており、中でも動植物、火、水、生活道具など人間の生活に関わりの深いもの、あるいは自然現象など人間の力の及ばないものの多くを「カムイ」として敬いました。この「カムイ」というアイヌ語は、日本語では「神」などと訳されることが多いようですが、「神」などの日本語と必ずしも意味が一致するものではありません。そこで、この小冊子では、出典の文献の記述をそのまま引用する場合を除き、「カムイ」というアイヌ語を用いることにします。

"Kamuy"
According to Ainu belief, a spirit is believed to dwell within every single being.
Ainu people have faithfully worshiped *"kamuy"* as referring to much of what was deeply involved in their daily lives. This includes fauna, flora, fire, water and utensils for daily use, as well as natural phenomena and other forces which are beyond human control. The term *"kamuy"* is often translated into *"Kami*(God)*"* in Japanese, yet the Ainu word for god is not necessarily identical to the Japanese counterpart in its semantic context. This handbook, therefore, uses the Ainu term *"kamuy"* without translating it except for quotations from reference sources.

物語紹介：「火の神」

これは千歳市の白沢（しらさわ）ナベさんが語った神謡の一つです。
物語のあらすじは次のようなものです。

私は昼も夜も針仕事にいそしんでおりました。家の中にはたくさんの着物が掛かり、夫は宝物の刀の鞘（さや）づくりに余念がありません。ある日、夫は外へ出かけたようでしたが針仕事に夢中になっていた私は見もしませんでした。しばらくすると窓の外にシジュウカラがやってきて、窓を何回もつつき、その音が言葉となって聞こえてきました。「あなたの夫は水の女神のところに行ってしまってますよ！」と。

そこで私は、祖母伝来の袋から、千里の道を走る下駄と手甲（てっこう）を取り出し、それを付けて川を上って行きました。水の女神のところに着いた私は小鳥に姿を変えて窓のところでさえずると、声に気づいた二人は夫婦のように振り向きます。私は怒って、雲のカムイに頼んで、その力で女神の家のもの全てを外に運び出してもらい、女神の着ているものも全て取り除いてもらいました。しかし二人はそれに気づきもしないで笑っているので、夫の着物も全て取り除いてもらいました。すると水の女神もはじめて気がつき、音をたてて天に昇ってしまいました。

それから私は夫と一緒に我が家に帰り、いつものように私は針仕事、夫は彫り物の毎日を送ったのです———

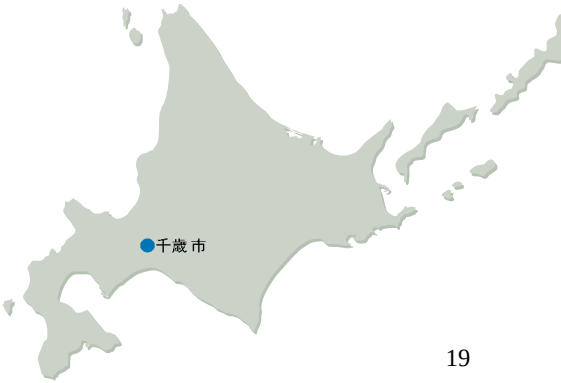
と、火のカムイが物語りました。

（片山龍峯編『カムイユカラ』片山言語文化研究所 1995年 所収）

写真8
片山龍峯編『カムイユカラ』
白沢ナベさん、中本ムツ子さんが語った神謡6編について、カタカナとローマ字のアイヌ語原文だけ記した絵本、日本語訳のほか言葉の意味などを詳しく説明した解説書、音声資料（CD）の3点がセットになっています。

この物語の最初の部分を紹介します。火の神が針仕事にいそしみながら暮らしている様子を述べているところです。

アテヤテヤテンナ　テンナ　ateyateyatenna tenna	
クンネ　ヘネ　kunne hene	夜も
トカプ　ヘネ　tokap hene	昼も
ケム　ルエトゥ　kem ruetok	針の縫う先
ケム　ルオカ　kem ruoka	針の縫う後を
アシッコテス　a=sikkotesu	私は見つめました。
アテヤテヤテンナ　テンナ　ateyateyatenna tenna	
アカラワ　アン　ペ　a=karwa an pe	私の作った着物の
ウ　トゥ　ウトゥル　u tu uturu	(縫い目の) 二つの間に
トゥ　イメル　クル　tu imeru kur	二つの光が
コトゥイトゥイケ　ナ　kotuytuyke na	きらきらと光り
レ　イメル　クル　re imeru kur	三つの光が
コトゥイトゥイケ　ナ　kotuytuyke na	きらきらと光りました。
アテヤテヤテンナ　テンナ　ateyateyatenna tenna	
ランケ　カケンチャ　ranke kakenca	低い衣紋掛け
リクン　カケンチャ　rik un kakenca	高い衣紋掛けは
コエレウェウセ　koerewewse	たわむばかりでした。



散文説話

日常の会話に近いような語り口調、あるいはそれよりもやや単調に聞こえる口調や、逆にやや大きく抑揚(よくよう)をつけたりする口調などで語られます。

物語には十分前後で語り終える短いものもあれば、数時間に及ぶ長いものもあります。

物語の内容は、主人公も話のあらすじもバラエティーに富んでいます。

人間が主人公で、自分の体験したことやカムイとの関わりなどを物語るもの、カムイが自分の体験などを物語る、内容としては神謡に近いもの、英雄叙事詩と同じような、人間にはない力を持った少年を主人公とする内容の物語などがあります。

Prose Tales

The texts of the tales in this category are recited in prosaic diction which is close to everyday conversation, in a relative monotone, although some are spoken with emphasis on distinct modulation. Some tales are as short as ten minutes while others may last a few hours.

Prose tales are characterized, from the aspect of content, by the rich variety of heroes and heroines and by the synopses. The leading roles in some tales are given to human beings who speak about their own experiences and their relations with *"kamuy"*, while in other stories *"kamuy"* speak of their own experiences where the content is very similar to that of mythic epics. Superhuman boys appear as leading characters in some tales just as in the heroic epics.

Many tales in which human beings play leading roles seem to be highly educational, teaching the attitudes and values people need to embrace. The characters ultimately lead happy lives after having overcome hardships and dangers of all sorts, while humans and *"kamuy"* whose natures are evil are punished.

Besides the tales cited above, there are some tales which are designed to transmit to following generations events of historic importance to their community and the experiences of predecessors of immediate kinship to them. These are also spoken in the same recitation manner as prose tales.

人間が主人公になる物語には、主人公が様々な苦労をしたり危機におちいったりしながらも、最後は、よい心がけの主人公は幸せな結末を迎え、悪者や悪いカムイは懲らしめられる、といったかたちで、社会で生きていく上での心がけを伝えるようなものが多いとされます。

自分たちが住んでいる土地での出来事や直接の先祖が体験したことを大切な事柄として伝える物語も、散文説話と同じようにして語られます。

写真９
知里真志保『アイヌ民譚集』
散文説話の中に、「ペナンペ」と「パナンペ」を主人公とした、隣に住んでいる者が成功して裕福になったのを真似して失敗してしまうという内容の物語があります。この本はこの種類の散文説話を中心に集めたもので、ローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。

物語の“語り役”

18ページの「火の神」の話の終わりは「～と火の神様が語りました」となっています。つまりこの物語は、主人公である火の神が自分で「私は」と物語るかたちになっています。このように、アイヌの物語では、いっぱんに主人公がその物語を自分で述べるものが多く、日本の昔話によく見られるように、主人公たちの動きが「むかしむかし、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ出かけました……」と語られるものはあまり見られません。

22ページの散文説話は、物語の最初は娘が主人公ですが、途中で主人公はその息子へと交代します。このような場合は物語の中で「私は」と語る役も息子に交代していきます。

物語紹介：「六重の喪服を着た男」

これは日高地方平取町の上田トシさんが語った散文説話の一つです。
物語のあらすじは次のようなものです。

（娘が語ります）私は物心ついたときから、誰もいない家に一人でいて、来る日も来る日も掃除をして暮らしていました。ある日、家に六重の喪服を着た男が現れ、一緒に暮らすようになりました。男は猟の名手で働きものだったので、何不自由なく幸せに暮らしました。私はやがて男に求婚され、子どもを身ごもるようになりました。

あるとき夫は、「実は自分はイシカリに暮らしていて、妻ももらっていたが、山猟から帰ると妻がいなくなっていた。今まで六回妻をもらったが、皆いなくなってしまったので、自分は家を出て六重の喪服に身を包み、放浪していたのだ」と告白し、一緒にイシカリに来てほしいと言いました。私は身重の体ではありましたが、夫とともにイシカリに行きました。ところが夫はそこで毒を盛られて殺されてしまいました。悲しみにくれる私の前に、夫の先妻（の幽霊）が現れ、夫は狩も上手で何をしてもよくできたので、悪い心を持った父親たちに妬まれ殺されてしまったのだ、私たちもそうやって殺されたのだ、あなたも早く逃げないと殺される、と告げられました。私は先妻たちに護られてようやく逃げ帰り、男児をもうけました。

（ここからこの息子が語ります）私が大きくなったある日、母が父のことを語って聞かせてくれました。それからというもの、私は父のかたき討ちのことばかり考えて暮らしていました。そしてあるとき、ついにイシカリへ行って父のかたきを討つことができました。村人たちは、かつて殺された父のことをたいそう気の毒がり、「罰があたったのだ」と私のかたき討ちを喜んでくれました。そして私は父の先祖を供養し、母のもとへ帰り、やがて美しい妻をもらい、子どもをもうけました。

私は祖父母も父も知らずに大きくなったのだけれど、今は先祖を供養しながらたくさんの子どもに囲まれて、「いつまでも祖父母、父を供養しておくれ」と言い残して死んでいくのです――――と、一人の男が語りました。

（財団法人アイヌ民族博物館編『アイヌ民族博物館　伝承記録３・昔話　上田トシのウエペケレ』財団法人アイヌ民族博物館　1997年　所収）

この物語の最初の部分を紹介します。娘が自分の生い立ちを語りはじめるところです。

マㇰ イキ ワ アナン ペ アネ ルウェ カ mak iki wa an=an pe a=ne ruwe ka	どうして自分がそうなのか
アエランペウテㇰ ノ、トゥムン トゥム タ a=erampewtek no, tumun tum ta	わからないけれど、ほこりの中で
ヤイェシカルンカアン マッカチ yayesikarunka=an matkaci	ものごころついた娘が
アネ ヒネ アナン ワ、オラノ a=ne hine an=an wa orano	私であって、そして
オナ カ サㇰ ウヌ カ サㇰ ノ ona ka sak unu ka sak no	父もなく母もなく
トゥムン トゥム タ アナン ペ ネ。オラノ、 tumun tum ta an=an pe ne. orano,	ほこりの中で暮らしていた。そして、
ヤイェシカルンカ アン ヒ オラノ yayesikarunka=an hi orano	ものごころついた時から
ケシト アン コロ トゥムン kesto an kor tumun	毎日ほこりを
エソイネ アルラ アルラ、 esoyne a=rura a=rura,	外に運んで運んで、
チセ オンナイ アルラ コロ アン。 cise onnay a=rura kor an.	家の中（のほこり）を運んでいた。

写真 10
アイヌ民族博物館編『アイヌ民族博物館　伝承記録3・昔話　上田トシのウエペケレ』
上田トシさんによる散文説話2編について、カタカナとローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せ、音声資料（CD）をつけています。

［3］口頭文芸について学ぶために

文献など

アイヌの口頭文芸について学ぶための基本的な文献や、物語の内容が書かれている文献を紹介します。

現在でも書店などで入手できるものには価格を記しました。

❶ 概説書

- 中川裕『アイヌの物語世界』平凡社（平凡社ライブラリー）1997年 960円（税込）
  アイヌの物語について、様々な物語の例をあげながら、専門的な内容についても具体的にわかりやすく説明しています。

- 北の生活文庫編集企画会議編『北の生活文庫第7巻 北海道の口承文芸』北海道新聞社 1998年 1,600円（税込）
  「アイヌ民族が語り継いだ口承文芸」と「和人の口承文芸」という構成で、北海道内の口頭文芸全般（おうた）について説明しています。アイヌの口頭文芸のところでは、簡潔な解説のほか、静内町出身の織田ステノさんが語った神謡、英雄叙事詩、散文説話を各1編ずつ紹介し、カタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を記しています。

- 『岩波講座 日本文学史 第17巻 口承文学2・アイヌの文学』岩波書店 1997年 3,300円（税別）
  最近の研究成果を述べた専門的な論文のほか、祈りの言葉や歌謡の伝承、アイヌ語の復興活動の歴史や現状などについての、様々な立場からの文章が載っています。

- 社団法人北海道ウタリ協会『アコロ イタク AKOR ITAK［アイヌ語テキスト1］』社団法人北海道ウタリ協会 1994年 1,500円（税別）
  アイヌ語学習のテキストとして作られたもので、「口承文芸」の項目を設けて概説と物語の例文を掲載しています。

❷ アイヌ語原文の物語を中心にしたもの

- 知里幸恵（編訳）『アイヌ神謡集』岩波書店（岩波文庫） 1978年 400円（税別）〈17ページ〉
- 知里真志保（編訳）『アイヌ民譚集』岩波書店（岩波文庫） 1981年 〈21ページ〉
- 萱野茂『カムイユカラと昔話』小学館 1988年 3,796円（税別）
  著者が日高地方の平取町などで採録した51編の物語を収録しています。散文説話や子守歌などは日本語訳を、神謡はカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。
- 中本ムツ子（語り）片山龍峯（編・解説）『アイヌの知恵 ウパシクマ１』片山言語文化研究所（発売元：新日本教育図書）1999年 2,500円（税別）
  千歳市に暮らす語り手の、先祖や親の教えなど幼い頃の思い出を絵本にしたものです。カタカナとローマ字のアイヌ語原文と日本語訳を載せ、文法の解説を付けています。

❸ 専門書など

- 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店 1977年（第2刷1995年）27,184円（税別）
  1930年代に採録した神謡など124編について、1編のみ日本語訳と解説を載せ、他はすべてローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳で載せています。特に註解は詳しく記されています。
- 知里真志保『知里真志保著作集』全6巻 平凡社 1973～1975年（第7刷 2000年）58,000円（税別）
  アイヌ語・アイヌ文化について大きな足跡を遺した著者の論文などを集めたものです。第１、２巻にアイヌ口頭文芸に関するものを収録しており、神謡、散文説話などに関する論文や物語の紹介が載っています。
- 金田一京助『金田一京助全集』全15巻 三省堂 1992～1993年 各巻8,000円前後
  アイヌ語やアイヌ口頭文芸に関する論文は主に7～11巻（「アイヌ文学」1～５）に収録されています。
- 中川裕（校訂）・大塚一美（編訳）『キナラブック口伝 アイヌ民話全集１ 神謡編Ⅰ』北海道出版企画センター 1990年
  旭川の杉村キナラブックさんが語った神謡29編にカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。
- 杉村キナラブックほか『キナラブック・ユーカラ集 旭川叢書（第三巻）』旭川市 1969年
  上記の本と同じ語り手による物語22編について、英雄叙事詩と神謡はアイヌ語原文と日本語訳を、散文説話は日本語訳のみを載せています。ソノシートレコードが付いています。

- 鍋沢元蔵（なべさわもとぞう）『アイヌの叙事詩』門別町郷土史研究会 1969年
  日高地方の門別町に住んだ著者が自ら筆録した神謡や英雄叙事詩をローマ字表記のアイヌ語と日本語訳で載せています。
- 金成マツ（かんなり）（筆録）・金田一京助（訳注、筆録）『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』全9巻 三省堂 1959～1975年（覆刻1993年）
  主に登別市生まれの金成マツさんが筆録した神謡や英雄叙事詩をローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳で載せています。

〈各地の教育委員会等が発行する報告書など〉

北海道教育委員会などで、口頭文芸をはじめとするアイヌの伝承を調査した記録を報告書にまとめて刊行しているシリーズがあります。ここでは、その中から口頭文芸を中心にしたシリーズを紹介します。物語については、原則としてカタカナとローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。

- 静内町教育委員会（編）
  『静内地方の伝承 ― 織田ステノの口承文芸 ―』1～5 静内町郷土史研究会 1991～1995年
  静内町の織田ステノさんが語った物語を採録したものの報告書です。
- 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会（編）
  『アイヌ無形民俗文化財記録』1～7 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1981～1986年
  全道各地で採録された物語などの報告書です。
- 北海道教育庁社会教育部文化課／北海道教育庁生涯学習部文化課（編）
  『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ』1～13 北海道教育委員会 1987～2000年
  全道各地で採録した神謡や散文説話などの報告書です。
  『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（ユーカラ シリーズ）』1～22 同上 1979～2000年
  金成マツさんが書き遺した英雄叙事詩のノートを順に活字化している報告書です。
  『アイヌ民俗文化財調査報告書（口承文芸シリーズ）』
  1～18 同上 1982～2000年
  1～6は登別市の知里幸恵さんが書き遺したノートについて、7～10は門別町の人から筆録した久保寺逸彦さんのノートについて、11からは八重九郎さんの語った物語についての報告書です。

❹ 童話・絵本として編集されたもの

アイヌの物語を絵本にしたものはこれまでに多く出版されています。ここでは、もとの物語が比較的はっきりと記されているものの中から、シリーズになっているものを中心に紹介します。

- 川上まつ子（語り）・中村齋（文）・北市哲男（絵）『ポロシルンカムイになった少年』財団法人白老民族伝承保存財団　財団法人アイヌ民族博物館 1986年
  平取町の川上まつ子さんから採録した、力強く成長していく少年のことを物語った散文説話を絵本にしたものです。
- 四宅（したく）ヤエ（語り）・藤村久和（文）・手島圭三郎（絵）『カムイ・ユーカラの絵本―神々の物語』ベネッセコーポレーション 1984～1990年
  これまでに『カムイチカㇷ゚』、『ケマコシネカムイ』、『チピヤㇰカムイ』、『イソポカムイ』など5冊が刊行されています。いずれも釧路地方白糠町の四宅ヤエさんから採録した物語を絵本にしたものです。

- 萱野茂（文）・斎藤博之（絵）『アイヌの民話絵本』小峰書店 1998～1999年 1,400円（税別）
  これまでに『オキクルミのぼうけん』、『風の神とオキクルミ』『木ぼりのオオカミ』の3冊が刊行されています。

- 萱野茂（文）・石倉欣二（絵）『火の雨氷の雨　アイヌの絵本』小峰書店　2000年 1,400円（税別）
  平取町の語り手による神謡をもとに書かれた絵本です。

- 松谷みよ子（文）・西山三郎（絵）『ちいさなオキクルミ　日本みんわ絵本』ほるぷ出版 1985年、本体1,450円（税別）
  知里幸恵『アイヌ神謡集』の中の物語を素材にして書かれた絵本です。
- 神沢利子（文）・赤羽末吉（絵）『けちんぼ おおかみ』偕成社 1987年
  杉村キナラブックさんの語った物語を素材にして書かれた絵本です。

視聴覚資料

アイヌの口頭文芸について、実際に語られたものを聞いたり、語っている様子を見ることができる視聴覚資料を紹介します。文献と同じく、現在も市販されているものには価格を記しました。道内の主な図書館などではこれらの資料を視聴できるところもあります。

- 札幌学院大学人文学部編『アイヌ文化に学ぶ』札幌学院大学生活共同組合 1990年 1,900円（税別）／別売カセットテープ『カムイノミ・カムイユカラ・ユカラ』1,300円（税込）
  大学の公開講座の記録です。図書のほうには、アイヌの口頭文芸に関する講義の記録のほか、静内町の織田ステノさんが語った神謡、英雄叙事詩のそれぞれ一部分と葛野辰次郎（くずのたつじろう）さんが語ったカムイへの祈りの言葉が載っています。別売のカセットテープには、これらの口頭文芸と祈りの言葉が収録されています。
- 片山龍峯編『カムイユカラ』片山言語文化研究所 1995年 7,300円（税込）〈18ページ〉
- 財団法人アイヌ民族博物館編『アイヌ民族博物館　伝承記録３・昔話　上田トシのウエペケレ』財団法人アイヌ民族博物館 1997年 1,500円（税込）〈23ページ〉
- 財団法人アイヌ無形伝承保存会編『アイヌ文化を学ぶ THE CULTURE OF AINU』財団法人アイヌ無形伝承保存会 1997年 4,500円（税込）
  アイヌ文化のあらましについての入門的な内容のビデオで、日本語・英語の2カ国語版です。この中で、それぞれ一部分だけですが、神謡、散文説話、英雄叙事詩の口演の様子を紹介しています。

- 『国際先住民年記念 第６回アイヌ民族文化祭』社団法人北海道ウタリ協会 1993年 8,000円（税込）
  北海道ウタリ協会が主催するアイヌ民族文化祭の記録ビデオ（ダイジェスト）です。口頭文芸の関係では散文説話の口演の模様などが収録されています。

- 萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成』全10巻 ビクターエンタテインメント 1998年
189,000円（税込）
日高の沙流地方の平取町や門別町などを中心に採録した神謡23編、散文説話13編、英雄叙事詩4編のほか、多数の歌や祈り言葉などをCD11枚とVHSビデオテープ1本に収録したCDブックです。解説書にカタカナとローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。

- 萱野茂『ウエペケレ集大成』アルドオ 1974年
沙流川流域で伝承されてきた散文説話11編を地元に住む著者が集めたものです。本文にカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せ、音声資料としてカセットテープが付いています。

- キングレコード『蘇えるユカラ　萱野茂（語り）』KICC-5217 キングレコード 1997年
2,427円（税別）
門別町と登別市の伝承者による英雄叙事詩2編を、平取町の萱野茂さんが語ったCDです。解説書にカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。

- キングレコード『昔話 ふるさとへの旅【北海道】』KICH-2312 キングレコード 1999年
1,905円（税別）
北海道の昔話などを収録したもので、アイヌに関しては胆振地方鵡川町の神謡1編と十勝地方本別町の散文説話2編を収録したCDです。解説書に日本語のあらすじが載っています。

- 萱野茂・平取アイヌ文化保存会『アイヌのうた』VICG-60400 ビクターエンタテインメント 2000年 1,995円（税込）
平取町で録音されたもので、アイヌの歌謡や祈り言葉などのほか、神謡・散文説話（昔話）・英雄叙事詩各1編が収録されています。解説書に物語のあらすじ、または逐語訳が載っています。

- 貫塩喜蔵（ぬきしおきぞう）『アイヌ叙事詩 サコロペ』 白糠町 1980年
  白糠町の貫塩喜蔵さんと母・キシさんが語った英雄叙事詩の、ローマ字とカタカナ表記によるアイヌ語原文と日本語訳とを載せ、カセットテープを付けたものです。

- 田村すず子『アイヌ語音声資料』1～12　早稲田大学語学教育研究所 1984～2000年 非売品
  早稲田大学語学教育研究所での学習用に作成された教材です。日高の沙流川地方を中心に採録した様々な物語の録音カセットテープにローマ字表記のテキストがついています。アイヌ語原文についてはカタカナ表記の版もあります。

- 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会編『アイヌ文化伝承記録ビデオ大全集』財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1976～2000年
  毎年一編ずつ製作されているアイヌ文化の記録映画シリーズです。この中で、『八重九郎のサコロペ』のほか、『千歳川・アイヌ文化伝承の人々』、『祈り・語り・食』、『イカㇲカㇲ・ノミ・イタㇰ』、『キナタ・テケカㇲペ・トゥイタハ』、『祈る・語る・演ずる』、『暮らす・伝える・守る』などの巻に口頭文芸が収録されています。

博物館など

博物館などの施設で、アイヌ口頭文芸の音声や映像を実際に視聴することができる施設をいくつか紹介します。

- **北海道立ウタリ総合センター：札幌市中央区　かでる2・7（7階）**　電話 011-221-0462
  常設展示室に隣接して、図書情報室や保存実習室があります。特に希望する方は「アイヌ民族文化祭（北海道ウタリ協会主催）」で記録した口頭文芸のビデオテープなどを図書情報室で視聴することができます。事前に連絡が必要です。

- **平取町立二風谷アイヌ文化博物館：沙流郡平取町二風谷（にぶたに）**　電話 01457-2-2892
  展示ゾーンの一つである「カムイ」というコーナーで、平取町に伝わっていたアイヌ口頭文芸のいくつかを視聴できます。

- **萱野茂・二風谷アイヌ文化資料館：沙流郡平取町二風谷**　電話 01457-2-3215
  館内で萱野茂館長著作のCDなどを聴くことができます。

- **アイヌ文化交流センター：東京都中央区八重洲 アーバンスクエア八重洲（3階）**
  電話 03-3245-9831
  アイヌの口頭文芸に関する図書の閲覧やビデオテープ等の視聴ができます。また月1回程度のビデオ鑑賞会を開催しています。

- **国立歴史民俗博物館：千葉県佐倉市城内町**　電話 043-486-0123
  第5展示室に設置されたビデオ機器と、ビデオボックスというコーナーとで、主に千歳市で伝承されていた神謡2編といくつかの歌を視聴できます。

- **国立民族学博物館：大阪府吹田市千里万博公園**　電話 06-6876-2151
  ビデオテークという装置で世界の民族文化の映像記録を視聴できるようになっており、その中にアイヌ文化に関して約30点のプログラムが含まれています。口頭文芸については「八重九郎のサコッペ」、「樺太アイヌの昔話」と「イフンケ」など4点があります。

写真11　国立民族学博物館のビデオテーク

●その他本書を書くにあたっての参考文献

- 萩中美枝『アイヌの文学　ユーカラへの招待』北海道出版企画センター　1980年
- 萩中美枝（執筆）・藤本英夫ほか（編）『サコロベの世界』札幌テレビ放送 1978年
- 萩中美枝「アイヌ英雄叙事詩サコロベ」『国文学 解釈と教材の研究』44巻14号　1999年
- 浅井亨（編）『日本の昔話2　アイヌの昔話』日本放送出版協会 1972年
- 藤村久和「〈神語り〉〈昔語り〉の新しい視座　アイヌ」『国文学 解釈と鑑賞』45巻12号 1980年
- 奥田統己「研究史」「研究文献目録」〔アイヌ口頭文芸〕『古代文学講座 第12巻』勉誠社 1998年
- 荻原眞子『北方諸民族の世界観―アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』草風館 1996年
- 北海道教育庁社会教育部文化課／北海道教育庁生涯学習部文化課（編）『アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査）』1～18　北海道教育委員会 1982～1999年
- 中川裕「アイヌ物語文学ジャンル名の分布と歴史」『言語学林 1995-1996』三省堂 1996年
- 佐藤知己「近隣諸民族との比較からみたYukar」『北海道教育大学紀要 第1部B 社会科学編』45巻1号 1994年
- アイヌ文化保存対策協議会（編）『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年

●協力（敬称略）

萩中美枝　上田トシ
財団法人アイヌ民族博物館　旭川市博物館　国立民族学博物館　北海道立図書館
札幌テレビ放送　社団法人北海道ウタリ協会

●写真提供、出典等

表紙：月岡陽一
写真 1：旭川市博物館
写真 2：財団法人アイヌ民族博物館
写真 4：北海道立図書館
写真 5：『サコロベの世界』札幌テレビ放送 1978年
写真11：国立民族学博物館
上記以外は当センター所蔵写真。

◆発行――平成12年10月

◆編集――北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801